



情報リテラシーについて

それ、本当に信じていいの？

レポートでWikipediaの内容をそのまま写して減点された、あるいはAIに書かせた文章が原因で単位を落とした——そんな話を耳にしたことはありませんか？Wikipediaは誰でも編集できるため、信頼性が高いとは限らないと言われています。また、AIは便利な道具ですが、あたかも正しいように見える“答えっぽい嘘”（ハルシネーション）を平気で返すことがあります。情報があふれる今の時代、私たちは毎日、何百、何千という「何かしらの言説」に触れています。授業、ニュース、SNS、動画、AIの回答……。その中には、確かな事実もあれば、「それっぽいけれど実は間違っている」情報も混ざっています。大学生である私たちは学び手であると同時に、情報を読み取り、選び取り、発信していく立場にもあります。だからこそ、今、私たちに必要なのが情報リテラシーなのです。

大学生活と情報リテラシー

「情報リテラシー」と聞くと、少し堅苦しく感じるかもしれません。情報リテラシーとは、「情報技術を使いこなす能力と情報を読み解き活用する能力の二つの意味をもち、後者は発信される情報の役割や特性、影響力などを理解する力、および自ら情報を収集、評価、整理し、表現、発信する能力など、情報の取扱いに関するさまざまな知識と能力のこと」と定義されています（小学館『日本大百科全書（ニッポニカ）』より抜粋）。つまり、私たちがネットやSNSといった膨大な情報の海の中から、必要な情報を見つけ出し、正確かどうかを見極め、目的に応じて使いこなす力、そして、情報を扱う側としての責任意識が求められているのです。大学では、レポートやプレゼン、卒論など、自分で調べ、考え、表現する機会が多くあります。高校までのように「与えられた情報を覚える」だけでなく、「どの情報を使うか」を自分で判断する力が求められます。こうした場面で役立つのが、情報リテラシーです。「引用元は信頼できるか？」「出典は明示されているか？」といった視点を持つことで、根拠のある主張になります。就職活動や進路選びでも企業ランキングや就活サイトの口コミなどには偏りがある場合もあります。そうした情報をうのみにせず、「何を根拠にしたランキングなのか？」と問い直す姿勢が大切です。

情報と、どう向き合うか

ほしい情報が簡単に手に入る現代は、とても便利です。でもそれは、薬にも毒にもなりうるもの。もしその情報が間違っていたり、偏っていたりすれば、自分の判断を誤らせたり、誰かを傷つけてしまったりすることもあります。情報リテラシーは、特別なスキルではありません。日々の中で、「これ、誰が言ってるの？」「どうしてそう言えるの？」「他の見方はないかな？」と、少しでも立ち止まって考える——そんな習慣のことです。便利な時代だからこそ、私たちは「情報とどう向き合うか」に気をつける必要があります。最後にもう一度、最初の問いを思い出してください。それ、本当に信じていいの？

参考文献

小学館（編）『日本大百科全書（ニッポニカ）』「情報リテラシー」[オンライン] 小学館，
<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001050307586>（2025年7月7日参照）

（地域共創研究科 M2 比嘉倫子）